

「やるよ」と母さんに言われて持ち帰ってはみたけど、巾一メートルもある掛け軸を、一人暮らしのこのマンションの何処に飾ればいいのか。帰りに乗った小田急電車の網棚の上に置いてきたかった。

山田達子は短大を卒業して、市役所に就職して三十年になる。二年前に福祉事務所に配属になったので、日常勤務の傍ら、関連法を勉強してケースワーカーの資格を取得した。すると急に周りから、ベテラン・ベテランと言われるようになったが、特別な使命感があるわけでもない。永年勤続と資格取得が重なって、役所から表彰状と旅行券を貰った。

「家族同伴で六ヶ月以内に使用してください」と書かれた二十万円の旅行券だ。その期限が残すところ十日となったので、隣の相模原市で農業をやっている母親を誘って、四日間の台湾ツアーに行ってきた。羽田でそのまま別れてもよかったのに

「じいちゃんが大切にしていた掛け軸をやるから…」と強引に言われて、実家に立ち寄って、この掛け軸を持たされた。

「今晚は泊まってヨ」と言うのを振り切って、やっとの事で町田の自宅マンションに帰ってきた。こうして六日間の休暇は終わった。

達子は帰宅するや、ソファアーの上に、桐の箱に入った掛け軸の包みを投げ出すと、一階にあるコンビニに行つて今晚食べる弁当を買った。

何時ものようにヤカンで湯を沸かす。沸きあがるまでのシュー・シューという音が好きなのだ。沸き上がって、ピーピー！と何かを催促するような音に変わるのも気に入っている。その時々気分次第で「ハイイ」とか「ハイハイ」とか「うるさいよ」なんて言いながらガスのスイッチをきる。ヤカンで湯を沸かすから、自宅でペットボトル飲料の類は飲まない。

着替えをして、さつき買ってきたコンビニ弁当を半分食べたところで、旅の

疲れがどっと出た。桐の箱を枕にして、ソファでウトウトしたが、首元が痛くなったので、起き上がって、掛け軸を箱から出した。じいちゃんが大事にしていたというから高価なのだろうか？などと思いつながら、椅子や植木鉢を部屋の壁側に寄せると、床の上に勢いよく、掛け軸をクルクルと転がした。

出たあゝ

オドロオドロしい幽霊の姿が現れた。達子は自分の等身大もある掛け軸の横に仰向けになって、肩を並べて天井の灯りをみた。そして首を捻って幽霊にウインクすると、立ち上がって、直立不動で掛け軸に向かって挙手をした。

「驚かさないでよ：アンタは魔界から来たの」と問いながら、顔を近づけてヨクヨク見ると、目は垂れ目でコメディアンの萩本欽一に似ている。耳はと言えば、福耳で布袋さんみたいだ。頭髮だって幽霊にしては多い。男前だ。

「アンタをこのまま寝かせておけない。起こしてやるワ」達子は着替えると、駅前の小間物屋へ走って、釘と金槌を買ってきた。壁に釘を打って、掛け軸を掛け終えて、残りの弁当を食べようとしたが、急に睡魔が襲ってきて、どうにも堪らなくなった。明日から又働かなければならない。ベテランと言われて、二十万円もらったことだし。達子は隣の部屋のベッドに潜り込んだ。

何時もと変わらぬ朝がきた。

身支度を終えて冷蔵庫から牛乳とバナナを取り出しながら、「おや：」と思っただ。昨晩確かにテーブルの上に食べかけの弁当を置いたまま寝たはずだが、プラスチックの弁当ケースはあるが、中身がない。ケースの中は舐めたようにきれいになっている。

「変だな」首を傾げながら、台湾土産の菓子折りを持つと、駅前から市バスに乗った。

一日が恙なく終わった。

今夜は自分で料理することにして、鮭の切り身と野菜を買った。玄関ドアを開ける迄、幽霊の事はすっかり忘れていたのに、部屋に入るなり「おかえり」という声を聞いたような気がして「寒いね、ストーブつけるね」なんて間髪おわずに応じた自分の声にビックリした。

この部屋に話し相手がいる：同居人がある：家族がいる：市役所に勤めて五年目に、じいちゃんが亡くなって、遺産でこのマンションを買った。勤務先の

市役所まで徒歩でも二十分のこのマンションは気に入ったが、こんなに長く住むつもりではなかった。見合い話もあったのに、一人暮らしを止めるキツカケにならなかった。

達子は幽霊の顔を見ながら夕飯の支度をした。幽霊も料理する達子を見ている。気がつけば、達子は一枚の鮭を半分にして二つの小皿に分けている。ご飯は二つの茶碗に、野菜の煮つけも半分に分けて盛った。テーブルの上にチマチマと小皿が並んだ。何時ものようにコンビニで貰った割りばしを取り出しかけて、慌てて、塗りの箸を二膳並べると「いただきます」と言ってみた。

楽しい気分だ。結局は達子が小皿のすべてを残さず食べた。そして、洗濯機を回しながら食器を洗った。NHKの9時のニュースを見ていたら、昨晚もそうだったが、突発的に猛烈な睡魔に襲われた。兎に角、眠いの、眠いのって。やっとの事で着替えてベッドに潜り込んだ。

夜中に物音を聞いた気がして、隣の部屋を覗こうとしたが、夢うつつだった。眠っているのに、眠かったのだ。

今日も朝がきた。化粧して、バナナを食べて牛乳を飲んで家を飛び出した。そして、恙なく仕事を終えた。吉野家で牛丼でも食べて帰ろうと思ったが、きのう炊いたご飯が釜の中にあるのを思い出して、天丼を作ることにした。コンビニでエビの天ぷらを、いつもは2本買うところを3本買った。豆腐の味噌汁も大分残っていたはずだ。

帰るなり同居人に「今晚は天井ヨ」と話しかけながら井を片手に、電気釜の蓋を開けた。確かに残っていた箸のご飯がない。思い違いだろうか。鍋の味噌汁もない。この頃忙し過ぎたな…と思いつながら…取り敢えずは、茹でた蕎麦の上のエビの天ぷらをのせて、缶の蕎麦つゆをかけて食べた。腑に落ちない気持ちでベッドに潜った。

町のざわめきと、辺りの何もかもが寝静まったの真夜中、遙か遠くの方で救急車が悲しげな声をあげている。達子も物悲しい気分になったが、いつの間にか深い眠りに落ちたようだ。

いきなり凄まじい物音にたたき起こされた。慌てて戸を開けると、掛け軸が床に落ちている。駆け寄って持ち上げたが、同居人がいたところは薄っすらとシミがあるだけで、幽霊は居なかった。掛け軸は吊り下げていた紐が切れて、台所のヤカンの蒸気でしっとり湿っている。

幽霊は、否、同居人は掛け軸が落ちた弾みで昇天したのだろうか。昇天した先はやはり魔界なのだろうか。達子には判らない。

おわり